

ました。

花のめ町は、花のき村のとなりにあり、とてもにぎやかな町です。そして今日は、いつもよりもずっとにぎわっていました。寺へ続く道の両側には、たくさん屋根が出ています。

「今日は縁日か。では、この子牛は、寺へ奉納するものなのだな。そんな大切なものを見知らぬ人にあずけるなんて無用心だな。わしが悪いやつだったらどうするんだ」

かしらは、そっとつぶやき、たづなを強くにぎりしめました。自分は絶対、寺に牛を届けるのだという決意のあかしでした。

こんなところを牛が歩いているのがめずらしいのでしょうか、通り過ぎる子ども達が、面白そうに牛をさわってゆきます。

「さわるのはいいが、おどかすなよ。この牛は、大事なあずかりものだから」

ふいに、角から勢いよく若い男が飛び出してきました。かしらはすんでのところで身をかえし、ぶつからずにすみました。

「ごめんよっ」

男は足早に走りすぎてゆきました。すれちがいざま、男は小さく舌打ちしました。

（あいつ、わざとぶつかろうとしたみたいだった。もしそ

うなら、ひょっとして……）

かしらは、すれちがった男をそのまま目で追いました。すると、男は、やせた老人にぶつかりました。明らかにわざとでした。そして、かしらは見ました。男が、ぶつかりざまに、老人のたもとからさいふをぬきとったのです。

かしらはたづなを放し、男を追いかけました。やめたとはいえ、元は盗人ですから、足には自信がありました。あつという間に逃げた男に追いつき、捕まえました。

「いててて、何するんだよっ」

「あの老人から、さいふをすっただろう」  
かしらは男のたもとから古ぼけたさいふをつかみだし

ました。

「あつ、それは！」

それを見て、老人はあわてて自分のたもとをさぐりました。

「ない、ない！ あれは、わしのだ」

そこへ、役人が二人、かけつけました。

「弥吉、そこまでだ」

「このやろう。やっぱりやりやがったな」

役人は、かしらに組みしかれた弥吉を縄でしばりました。「ありがとうございました。あいつはすりなんです、逃げるのがうまくて、なかなか捕まらなかったのです。そうだ、あなたのことをお奉行さまに報告しなくては。一緒に